

新生児の行動と気質の発達に関する研究(第一報)

— 1 - 2 か月乳児の気質 —

班員 前川 喜平 (慈恵医大小児科)
協力者 庄 司 順一 (都立母子保健院)
吉 野 伸 (都立荒川産院)
木 谷 信行 (国立大蔵病院)

赤ん坊は一人一人違っている、生まれたときから、それぞれに「個性」をもっている — このようなきわめて常識的と思われることが科学的に研究されるようになったのは、比較的最近のことと思われる。

表1には、乳児の「個性」に関する研究の概観を示したが、1930年代には、ShirleyやGesellによって先駆的な研究がなされている。1940年代、1950年代には、子どもの全体像としてのパーソナリティや個性ということよりも、新生児・乳児における個々の特性や能力についての「個人差」の研究がなされた。1960年代にはいと、乳児の「個性」についての研究が相次いで発表された。こうしたこと背景としては、新生児・乳児の研究を通して、母子関係が、母親から乳児へという一方向的な過程ではなく、互いに影響しあう、相互作用的な過程であることへの理解が深まり、その相互作用の一方の主体である乳児の行動特徴を明らかにすることが、母子関係の解明に重要であることがわかってきたことを指摘することができよう。

上記の諸研究のうち、もっともよく知られているのは、ThomasとChessらによる乳幼児の「気質」(temperament)に関する研究であろう。

Thomasらによれば、行動は、WhatとHowとWhyという3つの側面からとらえることができる(表2)。

Whatとは、何をするか、何ができるか、という「能力」(ability)に関する側面である。

Howとは、「何を」ではなく、「どのように」するか、という「行動様式」(気質)に関する側面である。

Whyとは、「なぜ」するか、という「動機づ

け」に関する側面である。

Thomasらは、従来、あまり取り上げられることのなかった“How”(気質)について、その成り立ちを明らかにしようとし、その結果、乳児の気質をとらえる行動特徴として、表3に示すような9つのカテゴリーを得た。

Thomasらの研究は注目すべきものではあるが、資料の収集は主として親との面接によっており、面接とその記録の整理に2時間以上を要し、また記録を整理するときにさまざまな解釈が可能でありうるなどから、実際に適用するのは困難である。そこで、これらの問題を解決するために、Careyは、Thomasらの面接記録にもとづいて、1970年に、4~7か月の乳児の気質的特徴を評価するための質問紙を作成し、さらに1977年に、その改訂版を発表した(Carey & McDevitt, 1977)。

筆者らは、Careyの質問紙を翻訳し、標準化を進めているところであるが、これを参考にして、新たに、1~2か月児に適用する質問紙を作成した。ここでは、この「行動様式質問紙」(1~2か月児用)について、これまでに得られた若干の結果について報告する。

方 法

行動様式質問紙(1~2か月児用)：これは、母乳(あるいはミルク)を飲む、ウンチをする、泣く、眠るなど、日常生活において容易に観察しうる50項目の質問からなっている。質問項目の採択にあたっては、Careyの質問紙のほか、諸種の発達検査をも参照したが、多くは筆者のこれまでの経験から得たものである。気質の特徴のカテゴリーとしては、表2に示した9カテゴリーのうち、「活動水準」(Activity level)、

「周期性」(Rhythmicity), 「反応の強さ」(Intensity of Reaction), 「反応をひきおこす閾値」(Threshold of Responsiveness)の4カテゴリーを採用し, さらに「自発性」(Spontaneity)と「人への反応性」(Social Responsiveness)の2カテゴリーを新たに追加した。

記入の仕方は, それぞれの項目について, 児の状態に応じて, 5段階尺度で答えるようになっている。採点は, 各項目に, 答えに応じて1~5の得点を与え, それをカテゴリーごとに集計し, さらにそれを答えた項目数で除した値が「カテゴリー・スコア」となり, これは, 1.00~5.00の間に分布する。

対象と手続

対象は, 国立大蔵病院で出生し, 1か月健診を受診した乳児109名である。健診時に母親に質問紙を配布し, 記入してもらった。いずれの児も, 在胎38周~41週, 出生体重2500g~4000gであった。

質問紙への記入には約15分, 採点には約5分を要した。

結果と考察

図1は, 各カテゴリー・スコアの月令による変化を示したものである。各カテゴリーについて, 左から, 0か月後半(平均日令27.1日), 1か月前半(1か月6日), 1か月後半(1か月20日), 2か月前半(2か月4日)の児のカテゴリー・スコアの平均を示したものである。対象児は, 1か月前半が71名(男47名, 女24名)で, 他は9~10名である。「周期性」(Rhy)や「人への反応性」(Resp)では, 月令によるスコアの変化もみられるようであり, また1か月前半のほかは児の数も少ないことから, 以下の分析は, 1か月前半の71名について行なう。

図2は, 1か月前半の児について, カテゴリー・スコアの平均と±1SDの範囲を, 男女別に示したものである。いずれのカテゴリーにおいても, 有意の差を認めなかったため, 以下では, 男女まとめて考察する。

図3は, 3名の先天性心疾患児の結果を, 標準

と比較して, 示したものである。この3名はいずれもチアノーゼが認められるものである。

一人一人それぞれ特徴があるが, 「活動水準」(Act)および「反応の閾値」(Thr)では3名とも標準データの-1SDを下回っており, 手足の動きが少なく, 感受性が低いことを示している。また, 「反応の強さ」(Int)と「自発性」(Sp)では2名が-1SDを下回っている。「周期性」や「人への反応性」(Resp)は, 児によってかなりの差があるようである。これらの結果は, わずか3名にすぎないが, チアノーゼのある心疾患児についての一般的な印象とある程度合致しているように思われる。

表4は, 親が自由記述をした児の性格あるいは行動特徴と, 「質問紙」のスコアとの関係をみたものである。

71名のうち, 児の性格・行動特徴について何らかの記述があったのが65%で, 「わからない」というもの, あるいは記入のないものは35%であった。

ほぼ同内容の記述をまとめ, このグループごとに, 各カテゴリー・スコアの平均を求めた。表4の一番左の欄には, ほぼ同内容の記述が4名以上あったグループを示し, その他の欄には, カテゴリーごとに, この7つのグループでスコアがもっとも高いものと, 低いものごとを示した。例えば, 「元気である」と記述された児のグループは, 7グループの中で「自発性」がもっとも高い。

「活発, 手足をよく動かす」と記述されたグループでは, 「反応の強さ」が低く, 反応をおだやかに表出するという特徴がみられた。高いスコアが予想される「活動水準」は, 中位であったが, このグループに属するいずれの児も, 全体の平均よりは高かった。その他のグループでは, 母親の記述から予想されることと, 質問紙のスコアとの間には概ね関連が認められるようである。このことは, 先の心疾患児の結果とあわせて, 本質問紙が, 児の行動特徴をとらえる上で, ある程度有効であることを示していると思われる。今後さらに例数を加えて, 検討していきたい。

口演発表：

1. 乳児の気質（第1報）
第44回 小児精神神経学研究会
55. 11. 1日 於静岡

原著：

1. 脳障害児早期発見のための最近の知見
— silent neurological abnormalitiesの診断, 小児科臨床 33巻, 9号, 昭55. 9
2. 新生児の人間生態学
— 新生児の神経機能
小児科診療, 43巻1号, 昭55. 1.

表1. 乳児の「個性」の研究の概観

'30s	Individuality	Shirley (1933)
		Gesell (1937)
'40s-'50s	Individual Differences in Various Reactions	
'60s	Individuality	Thomas, et al. (1963, 1968, 1977)
		Escalona (1968)
		Brazelton (1969, 1973)
		Birns, et al. (1969)

表2. 行動の3側面

(Thomas, et al., 1963)

WHAT	Ability
HOW	Behavior Style (Temperament)
WHY	Motivation

表3. 気質的特徴のカテゴリー

(Thomas, et al., 1963)

-
1. Activity Level
 2. Rhythmicity
 3. Approach or Withdrawal
 4. Adaptability
 5. Intensity of Reaction
 6. Threshold of Responsiveness
 7. Quality of Mood
 8. Distractibility
 9. Attention Span and Persistence
-

表 4.

カテゴリー グループ	Act	Rhy	Int	Thre	Spo	Resp
元 気					高	
活 発			おだやか			
よく飲む	高					
よく泣く		不規則	強 い	閾値低		
短 気				閾値高		低
おとなしい	低				低	
ゆったり		規則的				高

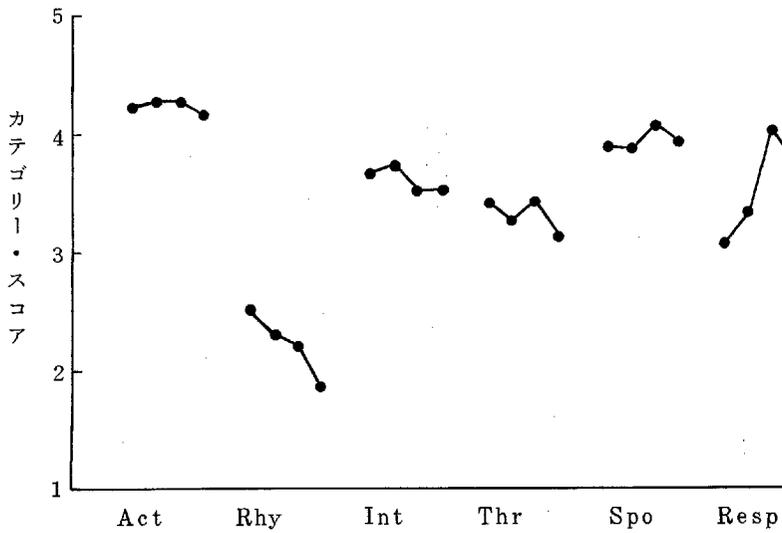


図 1.

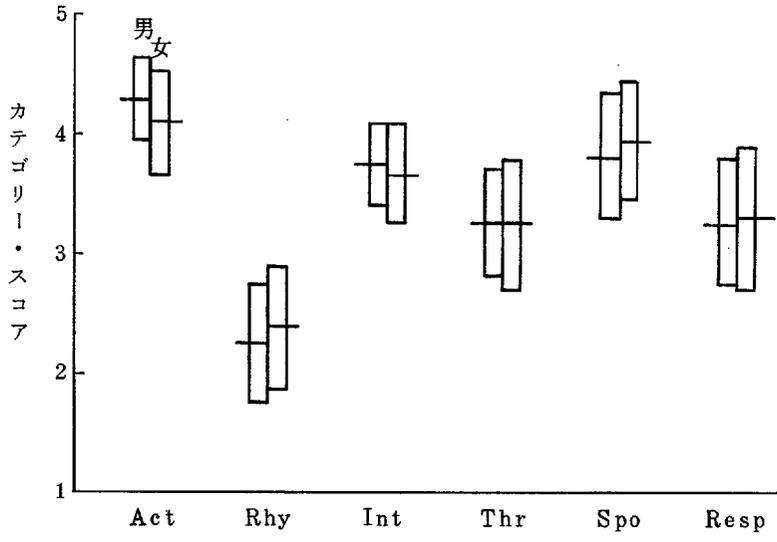


図2. カテゴリー・スコアの男女比較

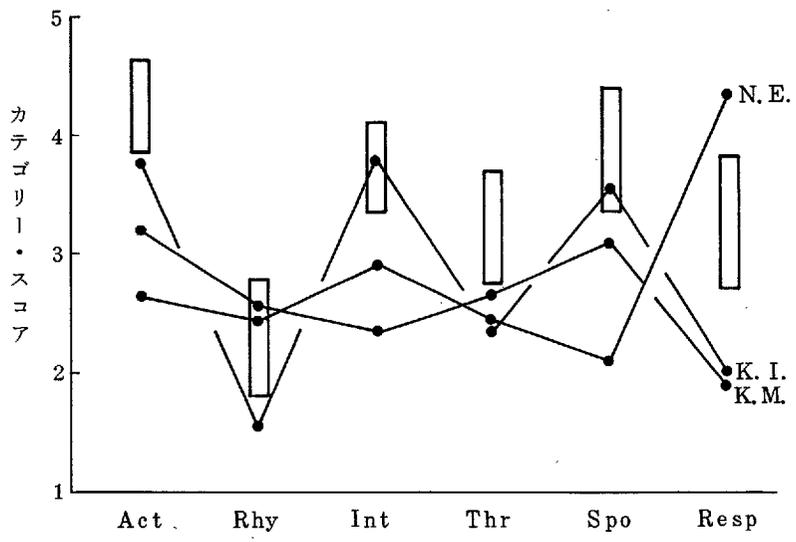


図3. 3名の心疾患児のカテゴリー・スコア



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



赤ん坊は一人一人違っている,生まれたときから,それぞれに「個性」をもっている—このようなきわめて常識的と思われることが科学的に研究されるようになったのは,比較的最近のことと思われる。

表1には,乳児の「個性」に関する研究の概観を示したが,1930年代には,Shirley や Gese¹¹によって先駆的な研究がなされている。1940年代,1950年代には,子どもの全体像としてのパーソナリティや個性ということよりも,新生児・乳児における個々の特性や能力についての「個人差」の研究がなされた。1960年代にはいると,乳児の「個性」についての研究が,相次いで発表された。こうしたこと背景としては,新生児・乳児の研究を通して,母子関係が,母親から乳児へという一方向的な過程ではなく,互いに影響しあう,相互作用的な過程であることへの理解が深まり,その相互作用の一方の主体である乳児の行動特徴を明らかにすることが,母子関係の解明に重要であることがわかってきたことを指摘することができよう。

上記の諸研究のうち,もっともよく知られているのは,Thomas と Chess¹らによる乳幼児の「気質」(temperament)に関する研究であろう。

Thomasらによれば,行動は,What と How と Why という3つの側面からとらえることができる(表2)。

What とは,何をするか,何ができるか,という「能力」(ability)に関する側面である。

How とは,「何を」ではなく,「どのように」するか,という「行動様式」(気質)に関する側面である。

Why とは,「なぜ」するか,という「動機づけ」に関する側面である。

Thomasらは,従来,あまり取り上げられることのなかった“How”(気質)について,その成り立ちを明らかにしようとし,その結果,乳児の気質をとらえる行動特徴として,表3に示すような9つのカテゴリーを得た。

Thomasらの研究は注目すべきものではあるが,資料の収集は主として親との面接によっており,面接とその記録の整理に2時間以上を要し,また記録を整理するときさまざまな解釈が可能でありうることなどから,実際に適用するのは困難である。そこで,これらの問題

を解決するために、Careyは、Thomasらの面接記録にもとづいて、1970年に、4～7か月の乳児の気質的特徴を評価するための質問紙を作成し、さらに1977年に、その改訂版を発表した(Carey&McDevitt,1977)。

筆者らは、Careyの質問紙を翻訳し、標準化を進めているところであるが、これを参考にして、新たに、1～2か月児に適用する質問紙を作成した。ここでは、この「行動様式質問紙」(1～2か月児用)について、これまでに得られた若干の結果について報告する。